

不登校が 教えてくれたこと

昨日二月一五日、ある会の二五周年の集いを行いました。記念講演には児童精神科医の渡辺位さん。その後、「ちよつとかわつたシンポジウム」のパートIが、かつて小中学生の時不登校となり現在は三〇代になった三人、パートIIがかつて子どもが不登校し、今二〇代になった息子とその父その母、という親子二組に登場いただきました。この日は集まった一六〇人の参加者の満場の感動をよびました。

ある会とは「登校拒否を考える会」といい、不登校の子をもつ親の方々の会です。

毎月一回第三土曜日に例会をもち、自分の体験や悩みを出し合い、考え合

っていくのですが、それは本当にいい学び合い、支え合いになります。自分一人ではない、という思いや、同じような経験をしている人々と気持が共有できること、いろいろな情報を得て、不登校していても道があることがわかること、などから親が落ち着き、元気になられていくのです。

親が元気になることは、不登校の子どもにとっても大切なことです。不登校の子どもにとって、親が「涙目」（泣いた状態の目をしていること）だったり、食事もとれなかつたり、眠れない、仕事や家事が手につかなく落ち込んで、などの状態は、自分が学校に通えないダメな子だから親がああなのだ、

とあって、より子どもは自責しますから。

また「登校拒否を考える会」でも、もっとも大切にしてきたことは、「子どもから学ぶ」ということであり、「子どもの心・子どもの気持を大事にする」「子どもから見えて安心できる親になる」ということです。

これは、そう簡単にできることではありません。なぜかというところ、親は、この日本社会で三〇年、四〇年生きる間に、これが当たり前、これが正しい、こうでなければならぬ、という価値観を身につけています。教育面で言えば、子どもは学校へ行つて当然であり、学校に行くことで一人前になれるので



奥地 圭子

NPO 法人フリースクール全国ネットワーク代表理事

【おうち けいこ】1941年生まれ。22年間の教職の後、1985年学校外の居場所・学び場として、東京シュール設立。99年NPO化し、理事長。不登校やフリースクールに関する全国的な活動も展開。不登校対象の私立中学校も開校。東京シュール葛飾中学校校長



「登校拒否を考える会」25周年の集いで司会を行う筆者（右）

あり、学校へ行かない・行けないなんて困る、認められない、といった考え方などは、国民の多数が持っています。ですから、不登校になった子どももの気持を理解し、受けとめる等ということ、は、しにくいのです。

たいていの場合、「このまま学校へ行かなくなって、家にひきこもられても困る」、「将来の進学や就職がうまくいかないのでは」などの不安から、何

とか登校させる試みをされます。

「これまでの子育てが甘かったのかもいけない」と思うと、とりわけ父親は、どなったり、たたき出ししたり、母親も無理に玄関から出して、車で学校へ送ったりもする。でも、子ども自身の気持が伴わないやり方では解決しないことは、やってみたら親が一番わかります。そして、自分をわかってくれない親に対する不信感と、針のむしろの上にいるようなつらさの時間が長ければ長いほど、子どもは苦しい状態が続ぎ、自立どころではなくなってしまう。

冒頭で紹介した、今や三〇代にいられた三人、親子で登場いただいた二〇代の二組とも、皆どこかで、会にこれら親の在り方で、何が大切か気づかれていきました。はじめは学歴社会の価値観で対応されていましたが、子ども本人を受けとめられるように変わられました。現在の職業は、三〇代の方は、男性は旅行会社に勤務、女性のうち一人は編集者、一人はフリースクールスタッフです。三人とも結婚され、すでに子どもさんがいて、親となられています。

親子で登場いただいた、もと不登校のお子さんで二〇代の青年も、今、一人は出版社を起業、一人は福祉を学ぶ大学生です。その父親、母親も「子ども不登校から、たくさん学び、もの

ごとを深く見られるようになった」「子どもが不登校してくれて有難う、生きていることが大切で息子が愛おしい」と発言されました。

このような親の会を始めたのは、私自身の子どもがかつて不登校だったことに関係しています。私もまた、不登校から深く学びました。

私は、そのころ、公立学校の教員をしていました。共働きで、やっとアパート住まいから、ローンで一軒家を購入することになった幸せもつかのま、移転に伴う転校先の学校で小三の長男が、いじめの対象になりました。

いじめは、異質排除の構造をもち、ストレスをためている周りの子たちが、ちよつとした違いを種に、いじめることによりストレスの歪んだ発散をすることから生じます。長男の場合は、転校生であったこと、クラスでたった一人眼鏡をかけていたこと、などが種だったようです。授業中うしろからとがった鉛筆でつむじをつつかれる、休み時間遊ぼうぜと声をかけられ、一緒に回旋塔まで行くと雨上がりの泥水の水たまりの上で止めて回してくれず、落ちて泥んこになる、下校時カバン持ちごっこで自分のカバンを側溝に捨てられる、などしたいにつらい日々になっていきました。その上、転校前の学校

と比べて、ひとことというど管理的な息苦しい空気があったことや、いじめへの対応など先生への不信感も重なったのでした。息子は、つらいのを我慢して登校していたと思います。本音はもう学校は行きたくなかったでしょうが、学校は行かねばならない、ずる休みをしてはいけない、とも思っていたようです。それは、あとから気づいたことで、毎日変わりなく登校しており、いじめの話は出て、それにくじけず行ってくれている、しっかりと子だ、と私は勝手に思っていて、本人がどれほどつらかったか今にして思えばわかっていませんでした。

子どもはやがて、朝になると頭痛、腹痛を訴えるようになり、そのうち吐き気や微熱も出てきました。学校を休みたい状態なのに休めない場合、体にノーサインが出てきます。登校拒否(一年ほど前から不登校というようになりましたが、それ以前のいい方です)の初期症状として知られますが、当時の私は、そんな知識も認識もなく、体調が悪いなあと医者に連れていききました。お医者さんも、その頃はよくお分りにならず、「風邪でしょう。お薬を出しておきますから、四、五日休ませなさい」とおっしゃる。それがよかったです。子どもは、学校と距離をとり、四、五日ほっとして、好きな事

をして過ごす日々があり、ぐっと元気になりました。そこで、学校との関係とわかっていない私も夫も、「そろそろ学校へ行けるよね?」と、声をかけました。子どもは、本音ではないのですが「ウン」と言います。そして登校しますが、しばらくするとまた、身体症状が出てくるので休ませます。すると元気になってくるので、また登校、と行ったり休んだり五月雨登校の日々でした。

夏休みは、郷里広島の祖父母のところにいき、蝉とり、海水浴と元気いっぱい、でも夏休みの終わり頃、迎えにいった新幹線の中で、しだいに東京が近づいてくると、腹痛、頭痛が始まったのをよく覚えています。

無事学校へ行ってくれますようにと一念でやっていた私は、ハラハラしつつも、子どもが徐々に追いつめられていることに気がつきませんでした。そして、とうとう五年生の運動会のあと、思いもかけないことになりました。九月いっぱい、身体症状が多少あっても、息子は一生懸命、炎天下の学年体育の練習に出席していました。観覧席で一人でみる結果になると、また友人たちから何をいわれるかわからないし、やるべきことをやらないのはだめだと必死だったのです。その頃は本当に疲れて帰宅する日々でしたが、運動

会当日は、みごと演技、係りの仕事、鼓笛隊をやり切りました。家族と共に帰ってきた玄関で、靴をぬぐため上りがまちに腰かけたまま、立てなくなっただけです。

「今元気に運動してきたのに」と信じられない気持で、後から立てるよう抱きかかえてみても、腰が抜けたような状態で、それから二週間くらいは、立てないので這ってトイレにも行く状態でした。

その上、もつと困ったことがもち上がりました。拒食症になってしまったのです。運動会の帰路、「帰ったらすぐ生ジュースを作ってね。のどがかわいて飲みたいから。」と言いましたので、帰宅後すぐ果物でつくってやりました。しかし、飲んで少しすると、口をおさえて吐いてしまいます。プリンでもみそ汁でもダメでした。透明の水だけは、のどを通りました。

あとで分かったのですが、私たちは生命体を維持するたくさんのエネルギーで生きています。体温を維持し、血圧を維持する、消化するなど、運動するエネルギーだけではありません。全力で、ある目標(彼の場合、登校して運動会をやり切る)まではエネルギーを出し続けられますが、終わった、と思った途端、エネルギーが出なくなる、いわばエネルギー涸れの状態になりま



す。消化のエネルギーが無かった胃袋としては、やってくる食べ物を戻すほかなかったのです。医者は、「若い子はやがてエネルギーが戻ってくるから、それまでは、学校も休み、家でゆっくり何もしないで寝ていなさい。」とおっしゃいました。

子どもはどんどんやせていく。お風呂に入れてやつても肩甲骨ばかりがとび出て、背中を洗ってやりながらも泣

けてきました。すると子どもが「お母さん、どうしたの?」というので、慌てて、「ウウン、何でもない。湯気が目に入って。」などと冗談をいったりしてごまかしながら、内心は、ものすごく自分を責めていました。自分の子育てのどこが悪かったんだろう、とおまけに、自分は教員でしたから、教員が、自分の子をまともに育てられないなんて、と体面も気にしていました。加えて、医者の説明は「共働きで、幼児期に愛情不足だったのが原因」と言われ、半信半疑の日々の中、夫が病院に連れていってくれた日、同じ説明を聞いてきて、私に、「おれは、頼んで働いてもらった覚えはない。子どもの教育は母親の責任だろうが。」と言いました。その考え方はあとで変わりますが、夫は夫で、学歴社会の中を会社員として働いており、子どもが登校拒否になっても苦しい気持だったため、いらだちを私にぶつけたのです。

でも、私もつらいのに、そんなことを言うので、「あら、あなたは結婚しても仕事を続けたい、といったら、共働きしよう、これからの男女は、子育ても家事も両方で分担して、二人で育てよう、といったじゃない。うまくいかないよ、そういうことなの。」と応戦して、夫婦ゲンカにもなりました。子どもの前では、なるべくやらないよ

うにと思っけていても、聞こえていて「ぼくのことでもケンカはやめてよ。」と子どもが悲しそうな声だったので、はっとしたこともありました。本当は、そんな問題ではないことが、やがてわかってきます。

目のウロコが落ちる日がやってきました。それは、冒頭で述べた渡辺位さんとの出会いからです。渡辺位さんは、国立国府台病院の児童精神科医長をなさっていました。色々医者まわりしても好転しないで悩んでいた私は、「ひと」という雑誌の編集部から、「渡辺位さんは、他の先生と違うけど、子どもの側から考えられる先生だよね。」という話をきき、予約をとりに行きました。すでにたくさんの方が待っていて、三ヶ月たないと予約がとれませんでした。

やつと予約日があった時は、子どもは、それまでの医者不信から、「病院には行かない。行っても何もよくなるらない。」と言ったのです。それを私が、「じゃ、一度でいいから会ってみないか。」と行ったら、「一度ならいいよ」と一緒に連れてくれました。私は、渡辺先生に会うなり、「続けて通ってきなさい」と言っけてほしいあまりに、「この子は、今日一回しか来ない、と言っているんです」と言いましたが、渡辺先生はこどもなげに、「そう。じゃ、今日一回

「ただ会いましょう。」とおっしゃり、初診で二時間の話ができました。

このことにも表れているように、渡辺先生は、子どもの気持を受けとめ、子どもを尊重する方でした。私はそばで座って二時間聞いていました。子どもは、こんなに自分のことをわかってくれた人、というのは初めてだったのでしょう。次から次に学校の話をしていました。学校に行くと、自分が自分でない気がする、と班競争で連帯責任をとらされたりするやり方や、それがおかしいから学級会で、そんなのやめようと言っても、「罰がないとちゃんとならないと思います」と意見が出て結局現実が変わらず、その苦しさなど訴え

東京シューレ葛飾中学校はここがちがう!!

1クラス20人、3学年120人の小さな新しい学校です

この東京シューレ葛飾中学校は、2007年に生まれたばかりの新しい私立中学校です。各学年40人、定員120人の小さい規模の学校になっています。学校全体がアットホームな雰囲気の中で過ごせる学校です。そして、あなたが仲間と一緒に歩いていくことのできる学校です。



写真のキャプション: 玄関、校舎、アットホーム、いろいろな工夫の廊下、トイレ、ホーム、ホームを改善する

ていました。

私が良かれと思ってやったことが、実は子どもを追いつめていたのだな、という発見もいくつかありました。拒食症になり、休めるようになってよかったですけど、友達と遊べないのがつまらない、と子どもに言われ、本当はそのつまらない気持を親の私にわかってもらいたかった言葉だということに気がつかず、そうだな、と思った私は、担任に「友だちをよこして下さい」と頼みに行ったのです。今日は一斑、明日は二班、と毎日クラスの子が夕方やってくるのですが、必ず帰りに、早く学校へ来てね、遠足はくるよね、という話をしていく、それが縄がよじれるように苦しいと子どもは渡辺先生に訴えていました。渡辺先生は「学校へ来させて上げるのが友情と勘違いしているかもしれないね。本当の友情は、学校へ今行けない気持をわかることから始まるけどね。」と応答しておられ、はっとしました。

そんな二時間の後、子どもはウーンと伸びをして「こんないい気持ちになつたのは何年ぶりだろう。お母さん、お腹がすいた。おにぎり食べたい。」と言ったのです。

大急ぎで帰宅、握ったおにぎりの二皿をたいたのが昼ごはん。そして夕食から普通食に戻ったのです。どんな努力をしても前の日までほとんど食べられなかったのですから、私も夫も、「あー、心と体はひとつだったんだ」と目からウロコが落ちる思いでした。

その時、息子は重要なことを言いました。「お母さん、ぼくはぼくでよかったんだね。渡辺先生に会ったらそう思ったよ。」

また、はっとしました。私も夫も、必死だったにもかかわらず、実は「あんたじゃだめよ。早く学校へ行けるようになってよ。」と本人の存在を否定していたと気がつきました。そのかげに学校化した社会の中で持ってしまった価値観や常識があり、苦しむ子どもの立場に立っていませんでした。それ以来わが家は変わり、息子は元氣になり、今は科学者として働いています。

この経験は、私の原点となりました。その後、冒頭の親の会やフリースクールを開設、不登校の子どもや親を支える人生を送っています。

